

氏 名	南野 奈津子
学 位 の 種 類	博士（社会福祉学）
学位記の番号	乙第74号
学位授与年月日	2019（令和元）年9月26日
学位授与の要件	日本女子大学学位規程第5条第2項該当
学位論文題目	女性移住者の生活困難とコーピング戦略
論文審査委員	主査 木村真理子（社会福祉学専攻 教授） 副査 林 浩康（社会福祉学専攻 教授） 壺 洋一（社会福祉学専攻 教授） 北本 佳子（昭和女子大学 教授） 森 恭子（文教大学 教授）

論文の内容の要旨

本研究の目的は、女性移住者が直面する生活困難とコーピング戦略を明らかにすることにより、彼女らに対するソーシャルワークのあり方を示すことである。女性移住者が貧困や暴力、社会的孤立にさらされやすい背景には、労働、家族内の人間関係、結婚や離婚、DVや在留資格の制度設計など多様な要因が重なり合っており、それらが彼女らの抱える問題を複雑にしている。こうした女性たちへの支援を検討するためには、女性たちがどのようにして生活困難を抱え、どのような生活状況におかれることで困難を解決することが難しくなったり、あるいは問題が深刻化したりするのか、詳細を把握する必要がある。同時に、女性移住者は彼女らなりのコーピング戦略を実践しながら、異国で直面する困難に対処している事実もある。ゆえに、女性移住者へのソーシャルワークを検討する際には、彼女らの生活困難のみならず、コーピング戦略にも焦点をあてていくことが不可欠である。そこで本研究では、以下のリサーチクエスション；1）女性移住者はどのようにして生活困難を抱えるのか、2）女性移住者は生活困難に対し、どのようなコーピング戦略を実践したのか、を設定し、女性移住者に対するソーシャルワークのあり方を提示することを試みた。研究方法として、生活困難を経験した女性移住者20名のインタビューデータを、ライフストーリー法を用いて分析した。

分析では、女性の生活困難やコーピング戦略を、女性たちが得ようとした状況やとりたい行動の選択、そして実践機会の自由度に着目して分析を行った。この視点は、アマルティア・センの「ケイパビリティ」の概念に基づいている。女性移住者が深刻な生活困難を抱える背景のひとつには、女性移住者であるがために様々な選択や行動をとることが、何らかの障壁により阻まれていると推測できる。そこで、女性たちの生活困難を抱える状況、および彼女らが実践しているコーピング戦略を、選択や実践の機会の観点から探究することで、彼女ら固有の困難やコーピング戦略をふまえた支援を見出すことができると考えられる。

る。

以下は、本論文の構成である。序章では、女性移住者を取りまく社会的状況を示し、女性移住者をめぐる問題の解決の必要性および本論文の構成を示した。第1章では、先行研究をレビューした。レビューでは、女性移住者の社会的背景と移住者の国際動向を概観したうえで、彼女らの脆弱性や社会的不利を指摘した。それとともに、女性移住者が様々な生活困難に対処するために実践しているコーピング戦略に関する研究を整理した。また、多文化ソーシャルワークの諸理論、および人の福祉的自由、特に社会的に不利を被りやすい人々の福祉を獲得するための機会保障をめぐる理論として、ケイパビリティズアプローチに関する文献を整理した。第2章では、調査方法を示した。データ収集法として用いた機縁法とライフストーリー法の概要や手順、データの収集方法や基準、および倫理的配慮を示した。第3章では、ライフストーリーインタビューの結果と解説を提示したうえで、第4章では考察、そして第5章で結論および今後の課題、研究の意義及び限界を示した。

インタビューの結果、女性たちが経験した生活困難は、母国社会・ホスト社会それぞれの文化的要因、移住者特性に基づく要因、そしてジェンダーに基づく要因が重なり合い、自身の望む状況につながる行動を選択し、実践することが抑制されることで生じていたことが明らかになった。文化的要因として、母国社会、ホスト社会それぞれの価値観や社会構造などが、女性が望む行動の選択や実践を抑制していた。母国社会の文化的要因としては、相互扶助を重視する家族主義、宗教の教義などがあった。ホスト社会の文化的要因としては、ホスト社会への同化期待などが見いだされた。移住者特性に基づく要因として、移住労働の構造や在留資格をめぐる問題が、女性たちのとりたい行動や選択の実践を阻んでいた。日本語学習や保育サービスなどの資源は、深夜、あるいは複数の仕事の掛け持ちなどの労働に従事するゆえに利用できないなど、日本の社会的支援がニーズに添わない状況も、女性たちに困難を抱えさせていた。ジェンダーに基づく要因として、夫からの暴力やコントロールは女性たちを被支配的な立場におき、彼女らが社会資源につながる機会を遠ざけていた。社会資源との接点を失うことは、女性たちが生活知識や技術、他者とのネットワークを構築することを妨げ、困窮に陥りやすくするとともに、子育て困難も生じさせていた。これらの要因が重なり合いながら、女性たちの福祉の獲得に向けた選択や実践機会の獲得を阻み、かつ女性たちが必要とした社会資源とつながることを阻んだ。結果として、女性たちが生活困難を抱える状況が生み出されていた。

女性たちは、こうした状況に対し、母国社会、ホスト社会それぞれに根ざした文化的アイデンティティ、サポートネットワーク、生活手法などの資源を、臨機応変に活用するコーピング戦略を実践していた。文化的アイデンティティとしては、女性たちは労働や家族生活で困難に直面した際には、「仕送りをして家族を支える」という思いを支えとして、過酷な労働を継続するなど移住労働の肯定、在留資格の安定を志向した実践などをとっていたほか、神への祈りや教会の活用など、宗教の信仰を困難を乗り越える糧としていた。ホスト社会のアイデンティティとして、女性たちは嫁役割の遂行により自分自身の居場所や発言力を獲得しながら、自身のやり方で生活を営む場を得ていた。サポートネットワークとしては同胞の友人や職場での同僚、母国に暮らす家族や親族、そして教会での人間関係など母国に根ざしたネットワーク、そして日本人の夫や夫の両親、日本人の知人や職場の関係者、福祉職などホスト社会に根ざしたネットワークの両方から支援を得ていた。

さらに、女性たちは母国、ホスト社会に根ざす生活手法を実践することで、生活困難に対処していた。母国社会に根ざす生活手法としては、同胞の知人間での仕事の依頼や紹介、母国の家族による子どもの養育などであった。また、家族や姑をたてるような言動、日本の母親の役割実践、母親ネットワークの活用などホスト社会に根ざす生活手法を日本人の知人や職場関係者、支援機関から学び、実践していた。

考察として、女性たちは生活基盤はホスト社会にあっても、母国に根ざした価値観やつながりを維持しており、時にそれがホスト社会で生活困難への対処に制約を与えていた。法的枠組みのみならず、文化的な要素がもたらす制約もあること、そしてどのような文化的要因が女性たちの実践を規定するのかを理解することが支援において重要であることが示唆された。また、社会資源の利用機会の獲得が困難な状況にはホスト社会における、女性移住者がおかれている労働環境が把握されにくい構造があり、かつ在留資格や暴力、就労と子育ての問題が連動するような困難にも対応する支援が不足しているなど、ホスト社会でのソーシャルワークの提供体制を検討する必要があることも示唆された。女性たちのコーピング実践では、生活において主体的な選択や行動の実践が抑制される状況にあった際、女性たちが母国社会に根ざす文化アイデンティティやネットワーク、生活手法をもち、それらをコーピング戦略として実践できたことは重要な意味をもっていた。これらの実践を受け入れた場所や相手の存在なしに、女性たちの二国の資源の臨機応変な活用を基盤としたコーピング戦略は有効に機能しない。女性たちが窮状を生き抜くために実践した知人同士での雇い合いやものの売買、サポートや情報共有などのコーピングは、その実践を許容する相手や環境があることで成立する。母国社会に根ざす生活手法や価値観を排除するようなソーシャルワークではなく、女性移住者の生活構造に添った、そして彼女らに固有のコーピングの実践を保障するような支援が求められよう。

この点をふまえ、女性移住者は様々な機会の保障を欠くことが生活困難を抱えさせる一方で、二つの社会の資源を活用することで困難な状況を生き抜いていることから、女性移住者のケイパビリティの保障を基盤とするソーシャルワークがミクロ・メゾ・マクロの領域で展開されるべきであるという結論を示す。センは、ケイパビリティは主体的な意思決定の自由の保障を基盤とするものであり、個々が有する特性に配慮したうえで、自身の財を活用してケイパビリティを発揮する機会を保障することが社会政策に求められるとする。女性たちが安定的な在留資格や日本人の配偶者という法的立場、就労能力や日本語習得への意欲という財を有していたとしても、主体的に選択、実践をできる機会がホスト社会で保障されなければ彼女らの財は生かされず、ケイパビリティの獲得、そしてホスト社会における真のシティズンシップやウェル・ビーイングの獲得はない。女性たちのコーピング戦略は、二つの社会につながりを維持し、それぞれの社会の価値観や生活手法を実践できるものがもつ強みである。女性たちのコーピング戦略の実践を受け入れる機会の保障や環境なしには女性のコーピング実践が困難となる。同化志向が強く女性たちのコーピング戦略の実践機会を抑圧するような政策ではなく、二つの社会につながりをもつゆえのコーピング戦略の豊富さに焦点をあて、ホスト社会側にたつものが彼女らのコーピング戦略の実践の自由度、すなわちケイパビリティを保障するようなソーシャルワークや社会政策を展開していくことが重要である。

論文審査結果の要旨

I. 論文の概要

本論文は、深刻な生活困難を抱えやすい女性移住者に対するソーシャルワークのあり方を明らかにするために、女性移住者がどのようにして生活困難を抱えるのか、そして女性移住者は生活困難に対しどのようなコーピング戦略を実践したのか、を明らかにすることで、女性移住者に対するソーシャルワークのあり方を提示することを試みた。人のウェル・ビーイングが保障されるためには、望む状態や環境を得るための行動を選択する機会、そして選択に基づいた実践を保障する環境が不可欠である。女性移住者が生活困難を抱える背景には、ありたい状態や行動を獲得する機会をめぐる自由が何らかの構造や状況により阻害される状況があるのではないかと。本論文はこの問題意識に基づき、「ケイパビリティ」に着目したうえで、生活困難を経験した女性移住者20名のインタビューデータを、ライフストーリー法により分析した。

分析の結果、女性たちは文化的要因、移住者の特性に基づく要因、そしてジェンダーに基づく要因により自身の望む選択や実践の機会が抑制されていたことが明らかになった。女性たちは選択や実践の機会が阻まれ、母国社会・ホスト社会の社会資源とつながることが困難となるなかで、深刻な生活困難を抱えるに至った。女性たちは母国社会、ホスト社会両方の社会に根ざした文化的アイデンティティ、サポートネットワーク、生活手法などを臨機応変に活用することで困難に対処していた。それは、女性たちが豊かで多様な資源とコーピング戦略を実践する力を有する存在であることを示していた。また、女性たちのコーピング戦略の実践を受け入れ、応じる人や環境が存在したことは、彼女らの実践が実効性をもつうえで不可欠であった。女性移住者は、ときにホスト社会では不安定な生活基盤におかれ、参加や実践に基づくケイパビリティの獲得が困難となる一方、二つの社会に根ざすゆえにもつネットワークや価値観、生活手法を基盤とした固有のコーピングにより対処している。ホスト社会において、移住者の母国に根ざす生活手法や価値観を排するのではなく、女性移住者のとりたい行動の自由を阻害する要因を取り除き、彼女らのコーピング戦略の選択や実践を保障するソーシャルワークや政策、つまりケイパビリティの保障を基盤とするソーシャルワーク実践および社会政策が求められる。

II. 審査結果報告

1. 総合所見

文化的多様性に配慮したソーシャルワーク実践が社会的に要請される状況の中で、女性移住者の生活困難と対処について把握することはきわめて重要なことであり、その点において本研究成果は示唆に富む。多重化した不利を抱える傾向にある女性移住者の生活実態がインタビューにより詳細に描写されており、ソーシャルワークが価値をおく視点に基づくデータ分析と導き出された内容には貴重な知見が含まれている。詳細な先行研究レビューを通して女性移住者の課題が整理され、著者の深い問題意識に基づき演繹的に設定された概念の提示により、インタビュー内容がわかり易く整理されている。貧困や暴力に晒さ

れやすい、ヴァルネラビリティの側面だけではなく、潜在的力の視点から分析することはソーシャルワーク実践の動向に鑑みても価値ある研究である。

2. 評価すべき点

グローバル社会における現代的な社会現象である女性移住者をテーマとし、丁寧な先行研究の調査により、女性移住者を取り巻く状況や実態やそれに関する研究状況が的確に論じられている。アマルティア・センの「ケイパビリティ」の概念を援用しつつ、女性移住者への支援のあり方（ソーシャルワークによる支援のあり方）を論じた先進的かつ意欲的な研究である点が、審査員全員から共通して高く評価された。

各審査委員からの評価された点は次のとおりであった。

まず、女性移住者は、移住に伴って多様な生活上の問題を抱えていることは想像に難くないが、これまで社会福祉の分野では実証研究が十分に行われてきているとはいえない。移住生活者に関する社会福祉学研究の蓄積が十分ではない中で、女性移住者の生活困難の実態と、その女性移住者が抱える生活困難への対応をコーピング戦略という視点から可視化した意義は大きい。

先行研究レビューにおいては、保健・福祉（ソーシャルワークを含む）に関する研究はもとより、教育、心理、異文化、人類、社会、政治経済、倫理、またトランスナショナリズム等の移住問題やジェンダーの課題に関連する多領域にわたる先行研究が適切に渉猟されている。また、移住者のコーピング戦略の知見や移住者への支援に関連するソーシャルワーク理論の特徴や意義を適切に整理している。

研究手法においては、ライフストーリー法を研究方法として用い、女性移住者の生活困難の実態と、その女性移住者が抱える生活困難への対応をコーピング戦略という視点から可視化しており、女性移住者の「リアリティ」が伝わる貴重な研究となっている。女性移住者の語りについての解釈は優れており、移住女性が母国社会とホスト社会とのつながりの中で生きるトランスナショナルな生活者であることが見事に描かれていた。

結果の分析・考察については、「コーピング戦略」の視点から多様な価値観やネットワーク、生活手法などのストレングスを見出し、それを活かす支援を提案した点と、その支援のあり方に関して「ケイパビリティ」の保障というオリジナルな視点から、ソーシャルワーク実践のあり方を提起している点が実証性と独自性という点で高く評価できる。また、ソーシャルワーク研究・実践において、トランスナショナルな視点の重要性を提示した点は大変意義深い。

3. 課題とされた点

審査委員からは以下のような点が課題として指摘された。

- ①ライフストーリー法が採用されているが、概念生成型の分析方法との差異等を明確にした上での採用理由を上げることが必要ではないか。また、ライフストーリー法ではデータ分析において、語り手と聞き手の相互作用による「物語世界」の構成も重要だが、語り手と聞き手の相互作用といった点が見えにくい。
- ②結果・考察では、生活困難要因やコーピング戦略の実践内容に関する項目やカテゴリーの設定過程がやや不明確に感じられる。本文や語りで触れられた、斡旋業者・雇用主の

管理・抑制、パワーハラスメントなどにより外部へのアクセスが阻害されることが強調されている点を図に反映させるなど、「本文と語り」に関連する分析や図において、工夫が必要である。

- ③本論文では「ケイパビリティ」の保障という点からのソーシャルワーク実践のあり方を提起している。その独自性は認めつつも、それがこれまでのソーシャルワーク研究の成果に対してどのような知見を提供するのかについて、さらなる言及（先行研究で提示されている多様なアプローチとの相違等）があれば、本研究の独自性と研究の意義がより明確になったと思われる。
- ④筆者の「ホスト社会で直面した問題を母国社会の価値観に基づいて対処したりすることによりホスト社会の状況の改善を妨げるといった負の側面もある。」（188頁）は重要な指摘であるが、その後の論の展開として「では、どのように、ホスト社会の彼女たちのケイパビリティの保障」をしていくのかについては十分に記述されているとはいえない。また、考察において、もう少しケイパビリティについての説明やケイパビリティを高める方法などの具体的記述があってもよかった。
- ⑤調査対象者の中で、フィリピン人以外の2名、在留資格が「留学」の2名については考察では触れられていないので、「外れ値」か、別の特徴をもつのか、あるいは「共通」な点が見出されていたのかは定かではない。思い切ってデータから外す、あるいは「在日フィリピン移住女性の生活困難とコーピング戦略」とするなどのほうが、筆者の調査結果から導き出された理論がより上手く収まったのではないかと。

4. 結論

以上、審査委員によって示された上記の課題への対応が期待されるものの、論文審査委員会は、全員一致で、本論文の手法および内容、水準ともに博士論文としての要件を満たしているものと認め、博士（社会福祉学）の学位を授与するにふさわしいとの結論に達した。

以上